

## P1-67

### 患者の求める交流への取り組み～やごとウィメンズセミナー～

名古屋第二赤十字病院 看護部

○おあたに さ き大谷 紗希、久米夕香子、河野 麻友

【目的】2011年に誕生した「レディース病棟」の活動の一環として、2014年から毎年「やごとウィメンズセミナー」を開催している。参加者およびスタッフから8割以上の満足感を得られているが、現活動を振り返り、今後の活動のあり方、展望・課題について報告する。【活動報告】2014年から年1回、婦人科腫瘍、乳腺腫瘍の経験者を対象とし、「やごとウィメンズセミナー」を開催している。病気の知識提供だけではなく、自身の体験談を講演して頂いている。分科会ではアピアランスやリンパケアなど生活に焦点を当てたもの、グリーフケアや子どもの向き合い方など心に焦点を当てた分科会も併せて行っている。各分科会では参加者が各グループに分かれて話し合うような参加型とし、患者同士の交流の場としても活用していただけるように努めている。サポートスタッフは病棟の看護師だけでなく、産婦人科医師、乳腺外科医師、薬剤師、専門看護師、認定看護師、セラピスト、理学療法士など多職種が協力して活動している。アンケート結果や社会の動向を参考に、分科会の内容を検討したり講演者の選定をしているため、参加者から8割以上満足であり、また参加したいと回答が得られ支持されていると評価できる。さらに参加者同士の交流の場になったとも評価できる。しかし、「やごとウィメンズセミナー」への参加が、日常生活にどのような影響を与えたなどは把握できていない。アンケート内容は毎年同じものだったため、今年度のアンケートで患者に与えた影響について追加・分析し発表する。また自分たちが知りたい内容を組み込んだアンケートを作成し、参加者の声を反映した内容になるようにしていきたい。そして、参加者の生活を豊かにする「やごとウィメンズセミナー」を開催できるよう、今後も活動していきたい。

## P1-69

### レスパイト入院が在宅介護者に与える影響

飯山赤十字病院 看護部

○あぜがみ ももこ畔上 桃子、下田華代子、宮澤 沙紀

【目的】当院ではサブアキュートとしての地域包括ケア病棟を設立し、地域で療養生活をおくる患者を対象にしたレスパイト入院の受け入れをしている。レスパイト入院を利用した家族の中には、本来の目的である家族の休息や息抜き時間が確保できていないことが推察される。そこで本研究では、レスパイト入院が主介護者にどのような影響を及ぼすのか明らかにし、今後の看護の示唆を得ることを目的とした。【方法】レスパイト入院を1ヵ月以上利用している家族3名に半構成的面接を行い、語られた内容を録音し逐語録に起こし質的記述の方法に従って分析を行った。【結果】「主介護者は一緒に住んでいない」「肩こりや腰痛は慢性化している」「毎日レクリエーションに参加し、食堂まで歩行したので、ADLは低下せずに済んだ」「入院中患者の様子が気になり病院に来ることがある」などのコードから、<患者の状態に左右される自宅介護への不安><身体的な不調がある><レクリエーションが効果的である><入院中の情報がほしい>などのサブカテゴリが構築された。最終的に、<自宅での生活は介護に左右される><介護者の体調不良が起くる><主介護者以外の存在に助けられる><レスパイトの利点を共感する><レスパイト利用上の不安がある>の5つのカテゴリに分類された。【考察】自宅での介護は、長年患者とともに寄り添って生きてきた主介護者にとっては、徐々にできないことが増え、介護が増えていくプロセスであり不安がついていったと考えられる。レスパイト入院の利用は主介護者が自身の疾患と向き合う時間、自分の時間をもつことにつながり、適度な休息が確保されたと考えられる。しかし、レスパイト入院の不安は解消されていないため、今後の課題にしていきたい。

## P1-71

### 赤十字の特色を生かした地域包括ケア病棟への提言

日本赤十字社 本社 救護・福祉部

○きよた としえ清田 敏恵

地域包括ケア病棟とは、在宅や施設からの急性期増悪に対する医療を行うとともに、急性期治療を経過し症状が安定した患者に対して、在宅や介護施設への復帰に向け医療や支援を行う役割がある。健康寿命の延伸、地域での高齢者支援、家庭での介護技術の講習内容と約1,500人の指導員がいる健康生活支援講習のリソースを、病院と在宅をつなげる地域包括ケア病棟の機能発揮に活用できないか、そして、高齢者とその家族の生活支援のための地域力の向上に向けて、病院・支部・地域のネットワークが図れないかという問題意識を持っている。そこで、平成28年2月に地域包括ケア病棟を有する病院に在籍している健康生活支援講習講師の7名、及び赤十字病院の中間管理者15名に、地域包括ケア病棟における健康生活支援講習の活用について、及びレスパイト入院での活用についてアンケート調査を行った。その結果、地域包括ケア病棟に入院中の患者・家族の介護上の要望に応え、介護スキルや介護サビズ等の短期講習の開催したり、効果的で安楽な介護技術の退院指導や介護教室等を通して在宅療養に向けての支援に活用できるという結果であった。また、レスパイト入院中に、介護者の健康管理や介護生活を継続できるようワンポイントアドバイスを行うことにより在宅療養を助長できたと答えていた。そして、多職種との合同研修会や見学会・連絡会等を通して、地域の関係団体・職種との連携を図ることができるという反応であった。健康生活支援講習のノウハウを活用した地域包括ケア病棟の取り組みは、今後、支部と病院の連携・協働を強化し、地域の高齢者とその家族の健康と尊厳を守り、在宅療養を支える地域力の向上へと、赤十字の特色を生かした最強の地域包括ケア病棟へつなげると考える。（この内容は、2017年3月8日第2回地域包括ケア病棟研究会での講演内容である）

## P1-68

### 在宅酸素療法を受ける患者に対する病院看護師による退院後訪問の実践

武蔵野赤十字病院 看護部

○ふるさわ きょうこ古澤 恭子

【目的】平成29年4月から平成30年3月までに実施した在宅酸素療法の患者13名に対する病院看護師による退院後訪問の実践を報告する。【患者背景】在宅酸素療法を導入した患者が安心・安全に在宅療養を継続するための療養上の支援を行うことを目的に、男性9名女性4名の患者に退院後訪問を実施した。年齢は64歳から89歳（平均76歳）、9名が配偶者または子供と同居していた。患者は緊急入院9名予定入院4名で、肺がんまたは慢性呼吸不全により在宅酸素療法が必要となった。退院後訪問は退院後翌日から8日後までに実施した。訪問看護師の介入を8名が受けており、退院後訪問に訪問看護師の同行があったのは5名であった。平成30年4月までに再入院した患者は4名であった。その理由は、疾患の進行によるものが3名でそれぞれの転帰は死亡または転院となった。1名は緩和的化学療法目的であった。【訪問活動内容】退院後訪問後の記録を分析し7つの活動内容が挙げられた。最も多かったのは「自宅での酸素指示量での酸素飽和度の評価と指示内容の遵守の確認」で、次いで「自宅での危険行動の確認とその指導」「訪問看護師との情報共有と連携」「訪問看護師導入の再検討」「患者から申告された自宅状況の確認と入院中の指導内容の評価」「独居または日中独居生活の確認」「介護者の状態確認」であった。【考察】退院後訪問を実施した在宅酸素療法の患者の多くは高齢で、突然の入院のうえ在宅酸素療法が必要となる病状であった。訪問看護師の介入を多くの患者が受けていたが、金銭的または他者の自宅への訪問の抵抗感などから地域支援者のサポートを受けない患者もいた。退院後訪問を実施した結果、感染や在宅酸素機器の管理不十分などの原因による再入院はなく在宅療養を継続することができた。

## P1-70

### 地域へ出向くミニ講座の取り組み

高知赤十字病院 看護部

○よりみつ依光みづほ、濱田 一豊

【はじめに】当院では平成26年より認定看護師や薬剤師、リハビリスタッフが地域へ出向いて講座を開催する「ミニ講座」を実施している。今回はその中で糖尿病看護認定看護師が行っているミニ講座の取り組みとその成果について報告する。【活動の実践】糖尿病看護認定看護師は「血糖値が気になる方へ」「生活習慣病が気になる方へ」など4つのテーマを担当している。その中には管理栄養士と協同して行うテーマもある。ホームページやチラシで広報を行い、依頼のあった地域に出向き60分程度の講座を行う。2016年度は5か所、2017年度は6か所に出向き、のべ406名の参加があった。依頼は地域の婦人会、住民課の健康づくり班、福祉保健所など多岐にわたっており、対象者も地域住民から県職員、特定検診受診者と幅広い。ケースによっては本番までに担当者や打ち合わせを行い対象者のニーズを考慮し内容を検討している。講座は一方向的講義形式ではなく、参加型の内容で視覚に訴える教材なども活用している。ミニ講座の中では院内で行っている糖尿病教育入院などについても広報を行っている。講座を受けた方が教育入院を希望されたケースもあった。【考察】糖尿病をはじめとする生活習慣病は一次予防が重要である。今回地域に出向き、健康増進・受診行動促進などの活動を行うことができ、一次予防、重症化予防の一端を担うことができていると感じている。また他職種と協同すること、対象者のニーズに合わせて効果的な健康教育を行うことで自らのスキルアップにつながった。また参加した方を教育入院につなげることもでき、受診行動促進、病院の広報という面からも成果を感じている。【おわりに】糖尿病看護認定看護師が行うミニ講座は今後も需要が増えると考えている。より効果的な講座を検討し、地域住民の生活習慣病の一次予防に貢献していきたい。

## P1-72

### 人工呼吸器セミナーで使用する気管切開用吸引モデルの作成と活用

高松赤十字病院 看護部<sup>1)</sup>、高松赤十字病院 臨床工学課<sup>2)</sup>、

高松赤十字病院 リハビリテーション科部<sup>3)</sup>、高松赤十字病院 呼吸器科<sup>4)</sup>

○ふけ あきこ福家 明子<sup>1)</sup>、藤川 啓子<sup>1)</sup>、西山 寛子<sup>1)</sup>、西村あけみ<sup>1)</sup>、谷本美智子<sup>1)</sup>、河野めぐみ<sup>1)</sup>、三枝 幸子<sup>1)</sup>、古賀くみこ<sup>1)</sup>、松本 浩伸<sup>2)</sup>、曽我部 隆<sup>3)</sup>、山本 晃義<sup>4)</sup>

当院では、2006年から3学会合同呼吸療法認定士を中心とした呼吸ケアサポートチーム(RST)と呼吸ケア委員会が主催する人工呼吸器セミナーを毎年開催している。その中で新人職員及び人工呼吸器装着患者のケア経験がない医療職員を対象とした気管内吸引指導を行っている。気管内吸引には開放式吸引と閉鎖式吸引があるが、日本呼吸療法医学会の作成する気管吸引のガイドラインでは、「閉鎖式吸引は感染防御に優れているというエビデンスはないものの、開放式に比べて酸素化と肺容量の維持という点で明らかに優れている」とあり、人工呼吸中では閉鎖式吸引を推奨している。閉鎖式吸引チューブは正しく使用されないとリークによる低酸素状態や垂れ込みによるVAP(人工呼吸器関連肺炎)を引き起こすリスクがあるため、RSTでは実技による教育が必要と考えた。そこで、RSTでは気管切開用吸引モデルを独自に考案・作成し、2010年より人工呼吸器セミナーでの吸引実技に使用している。気管切開用吸引モデルは、ペットボトルや透明ホース等安価に入手出来る材料で作成しており、軽量で持ち運びしやすい。そして透明な素材を用いることで吸引実技が視覚的にも理解しやすいよう工夫している。このモデルはセミナー受講者の意見を取り入れながら改良を重ねている。その作成方法と活用について、実物を用いて紹介する。